

『コリントの信徒のみなさんへ 第一』私訳(II)

— 承前 —

阿 部 包

前号(第 11 号)に掲載した『コリントの信徒のみなさんへ 第一』(I)に続いて、その(II)を掲載する。今回は、7 章から 11 章までである。今回掲載する部分の小見出しを列記すると、次のとおりである。〈結婚をめぐる問題〉、〈主が定めた生き方〉、〈結婚していない人と夫を亡くした婦人〉、〈偶像に供えられた肉〉、〈使徒の権利〉、〈偶像崇拜に対する警告〉、〈すべては神の栄光のために〉、〈礼拝のときの頭の被い〉、〈主の晩餐の乱用〉、〈主の晩餐の制定〉、〈主の晩餐の与り方〉。

なお、前回予告した参考文献一覧は、12～16 章を掲載する次回に回す。

コリントの信徒のみなさんへ 第一

7

〈結婚をめぐる問題〉

1 ところで、あなたがたが書いてきたことについてです。人間にとっては、女に触れないのがよいことです²⁰⁷。2 しかし、不品行のため

²⁰⁷ 「人間にとっては、女に触れないのがよいことです」は、*kalon anthrōpōi gynaikos mē haptesthai*。gynē (女) と対比する場合は、通常、anēr (男) を用いるはず。だから、普通の表現であれば、*anthrōpōi* ではなく *andri* となる。動詞 *haptō* は、中動相で属格を支配し、「手をつける、触る、触れる」を意味し、夫婦間の交わりを意味する場合もある。

に²⁰⁸、各自自分の妻を持ちなさい、また、女も各自自分の夫を持ちなさい。3妻に対して、夫はその義務を果たしなさい、しかし同じように、妻も夫に対して(そうしなさい)。4妻は自分のからだを意のままにする権利を持ちません²⁰⁹、むしろ、(それを持っているのは)夫です。しかし同じように、夫もまた自分のからだを意のままにする権利を持ちません、むしろ、(それを持っているのは)妻なのです。5あなたがたは、お互いに相手を拒んではいけません。ただし、合意に基づいて、しばらくの間ならば例外です²¹⁰。それは、あなたがたが祈りに専念し²¹¹、再び一緒になるためです。そうすれば、あなたがたの自制力のなきを用いてサタンがあなたがたを誘惑することはないでしょう。6しかし、わたしがこのように言うのは、譲歩であって、命令ではありません²¹²。7むしろ、わたしが望むのは、すべての人がわたしのようになることです。とはいえ、人は各自、自分に固有の賜物を神からいただいており、人はそれぞれ違うものです²¹³。

²⁰⁸ 「不品行のために」は、*dia* …… *tās porneiās* の直訳。「不品行を理由に」。むしろ、他の諸訳が適切に補っているように、「不品行を避けるために」の意味。

²⁰⁹ 「意のままにする権利を持ちません」と訳したのは、*ouk exousiazēi. exousiazō* 「(……に対して)力を持つ、権力を行使する、権利を持つ、意のままにする、支配する」。(……)の部分、通常、属格で表現される。

²¹⁰ 「ただし、合意に基づいて、しばらくの間ならば例外です」と訳したのは、*ei mēti an ek symphōnou pros kairon*。直訳は「合意によって、しばらくの間という以外は」。「ただ合意のもとに一定期間ひかえるのは別である」(田川訳)。

²¹¹ 「あなたがたが祈りに専念し」は、*scholasēte tēi proseuchēi. scholazō tini* で「……のために暇がある、暇である」から、「……に専念する、専心する」。*scholē* 「講堂、学校」(元来の意味は、むしろ「閑暇、討論、講義」)。

²¹² 「しかし、わたしがこう言うのは、譲歩であって、命令ではありません」と訳したのは、*touto de legō kata syngnōmēn ou kat' epitagēn*。

²¹³ 「人はそれぞれ違うものです」と訳したのは、*ho men houtōs, ho de houtōs*。直訳は「ある者はこのように、またある者はそのように」。もちろん、意識である。「ある人はこうしており、他の人はそうしている」(協会訳)、「ある人はこれを、他の人はそれを」(バルバロ訳)、「人それぞれに生き方があります」(新改訳)、「各人各様の生き方をしています」(フランシスコ

8 さて、結婚していない人と夫を亡くした婦人に²¹⁴ 言います。わたしもそうしているように、今のままでいるのが彼らにとってはよいことです。9 しかし、もし自制できないなら、結婚しなさい。なぜなら、激しく燃え上がる²¹⁵ よりは結婚する方がましだからです。10 また、既に結婚している人に命じます。(命じるのは)わたしではなく、主(ご自身)ですが、妻は、夫と別れてはいけません²¹⁶。11—しかし、もし、別れるのなら、そのまま結婚せずにいるか、あるいは夫と和解するかしなさい、—そして、夫は、妻との関係を解消してはいけません²¹⁷。

12 この他の人々に対しては、わたしが言うのであって主(が言うの)ではありません。もし、ある兄弟が信者ではない妻を持っていて、その

会聖書研究所訳)、「この人はこのように、あの人はあのようになります」(前田訳)、「人によって生き方が違います」(新共同訳)、「それぞれがそれぞれなのである」(田川訳)、など。

²¹⁴ 「夫を亡くした婦人に」は、*taïs chērais*。従来は、「寡婦、やもめ」の訳語が使われてきたが、現在では、いずれもあまり使われないので、こう訳しておいた。

²¹⁵ 「激しく燃え上がる」は、*pyrousthai* < *pyroō* 「燃やす、火を点ける」。新約での用例はみな受動で「激しく燃える、燃え上がる、精錬する」を意味する。ここでは、不定詞。「(情欲に)燃える」(バルバロ訳)、「欲情に身を焦がす」(フランススコ会聖書研究所訳、新共同訳)、「情欲の炎を燃やす」(青野訳)、「燃えさかる」(田川訳)。「情に燃える」(協会訳、前田訳、新改訳)は、現在では意味を伝えきれないだろう。ベン・シラの知恵 23:17 「燃える火のような熱い魂は、燃え尽きるまで消えない。自分の肉のからだにおいて淫らな人間は、火が燃え尽きるまでやめない。淫らな人間にとってはどんなパンも美味しく、死ぬまで飽きることがない。」(新共同訳では、23:16。ただし、その1~2行目だけが、原文の16節に対応する。)

²¹⁶ 「別れてはいけません」は、*mē chōrīsthēnai* < *chōrizō* 「分離する、引き離す」、受動で「別れる、離婚する、異なる」。ここでは、1 aor., 受動、不定詞。

²¹⁷ 「妻との関係を解消してはいけません」は、*gynaika mē aphienai* < *aphiēmi* 「去らせる、暇をやる(出す)、棄てる、放棄する、放免する、免除する、(…との)関係を解く」。不定詞。特に13節でも同じ訳語を使いたいのので、一般的な「…を離縁する」ではなく、「…との関係を解消する」と若干説明的な訳語を選んだ。「妻が夫を離縁する」という表現は、現代日本でこそ奇妙に聞こえないが、ユダヤを含む古代地中海世界では通用しないはずである。

妻も彼と一緒に暮らすことを望んでいるならば²¹⁸、彼女との関係を解消してはいけません。13 また、もし、ある女が信者ではない夫を持っている、その夫も彼女と一緒に暮らすことを望んでいるならば、(やはり)彼との関係を解消してはいけません。14 なぜなら、信者ではない夫は(信者である)その妻によって²¹⁹ 聖別され²²⁰、また、信者ではない妻は兄弟によって²²¹ 聖別されているからです。そうでなければ、あなたがたの子どもたちは汚れているはずですが、実際は聖なる者たちです²²²。15 しかし、もし、信者ではない者が別れていくのであれば、別れていかせなさい。兄弟であれ姉妹であれ、このような関係には縛られていません²²³。平和のうちに(生きるように)あなたがたを神は召されたのです。16 実際、妻よ、どうして分かるでしょう、あなたが夫を救えるかどうか。また、夫よ、どうして分かるでしょう、あなたが妻を救えるかどうか。

〈主が定めた生き方〉

17 それが出来ないのであれば²²⁴、各自、主が分け与えてくださった(分の)とおりに、神が各自を召してくださった(状態の)とおりに、そのま

²¹⁸ 「その妻も彼と一緒に暮らすことを望んでいる」と訳したのは、 *hautē syneudokeī oikeîn met' autoû*。 *syneudokeī* の *syn* のニュアンスを「その妻も」の「も」に込めた。 *syneudokeō* 「喜ぶ、同意する、賛成する、承認する」。ただし、 *eudokeō* 自身が「よいと思う、喜ぶ、同意する、望む、賛成する、是認する」などを意味するので、 *syn* のニュアンスを別に訳文に出したところ。

²¹⁹ 「その妻によって」と訳したのは、 *en tēi gynaiiki*。「その妻との関係において」。

²²⁰ この節で「聖別され」、「聖別されている」と訳したのは、 *hēgiasthai*。 1:2, 6:11 にも、同じ動詞 (*hēgiasmenois*, *hēgiasthēte*) が出ていた。

²²¹ 「兄弟によって」は、 *en tōi adelphōi*。 もちろん、「兄弟」は「信者である夫」を指す。

²²² 「実際は聖なる者たちです」は、 *nyn de hagia estin*。

²²³ 「このような関係には縛られていません」は、 *ou dedoulōtai……en tois toioutois*。

²²⁴ 「それが出来ないのであれば」と意識したのは、 *Ei mē*。 通常は「そうでなければ」。 16 節の疑問文「どうして分かるでしょう」を受けて、「わからないのであれば」。

まに歩みなさい²²⁵。このとおり²²⁶、すべての教会でわたしは命じています。18 割礼を受けた者として、ある人が召されたのであれば、(その跡を)包皮で覆い隠そうとしてはいけません²²⁷。無割礼の状態、ある人が召されたのであれば、割礼を受けようとしてはいけません。19 割礼は取るに足りないものですが、無割礼も取るに足りないものです。むしろ、(大切なのは)神の掟の遵守²²⁸です。20 各自、召されたときの状態に、他ならぬその状態に²²⁹留まっていなさい。21 奴隷としてあなたが召されたとしても、気にしてはいけません。そうです。たとえ、実際に自由になることができるとしても、むしろ、あなたは(召されたときの状態を)用いなさい²³⁰。22 なぜなら、主にあつて奴隷として召された人は、解放

²²⁵ 「歩みなさい」は、peripateitō < paripateō 「歩む、逍遙する、生活する、振舞う」。

²²⁶ この「このとおり」もすぐ前の「そのとおり」も、houtōs の訳。

²²⁷ 「(その跡を)包皮で覆い隠そうとしてはいけません」と訳したのは、mē epispāsthō < epispāō。中動相で「包皮を被せる、包皮を被せて割礼の跡を覆う、包皮で覆って割礼の跡を隠す」。命令、3人称、単数。

²²⁸ 「神の掟の遵守」は、tērēsis entolōn theou。「掟」は複数。

²²⁹ 「召されたときの状態に、他ならぬその状態に」と訳したのは、en tēi klēsei hēi eklēthē, en tautēi。

klēsei < klēsis は「召命」と訳したいところだが、日本語訳では eklēthē「召された」と同語反復的表現になってしまうので、それを避けて「状態」と訳した。直訳的には、むしろ、「召されたときの召命、他ならぬその召命のままに」くらいに訳すのがよいか。

²³⁰ 「そうです。たとえ、実際に自由になることができるとしても、むしろ、あなたは(召されたときの状態を)用いなさい」と訳したのは、all' ei kai dynasai eleutheros genesthai, mällon chrēsai。alla は強調を表す「然り」と取る。解釈が困難なのは、最後の mällon chrēsai であるが、従来、大きく分けて次の2通りの解釈がなされてきた。① chraomai「利用する、使う、用いる」の対象を、「自由になることができる」そのチャンスと取る解釈。その場合、alla もごく一般的な意味に解し、「しかし、もし、実際に自由になることができるなら、その機会を用いなさい」のように訳す。フランシスコ会聖書研究所がこの立場で、「そうしたほうがよい」と訳している。②「用いる」の対象を、「召されたときの状態」すなわち、「奴隷であること」あるいは「奴隷身分」と取る解釈。私訳は後者と解したもの。その理由は、直後の gar で始まる 22 節との意味上の整合性を重視したいため、である。W. Wolter による項目 `mällon` (『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 II』教文

されて主のものとなった人²³¹であり、同じように、自由人として召された人は、キリストの奴隷なのですから。23 代価を払ってあなたがたは買い取られた²³²のです。あなたがたは人間の奴隷となってはいけません。24 兄弟のみなさん、各自、召されたときの状態に、他ならぬその状態に²³³、神の前では留まっていなさい。

〈結婚していない人と夫を亡くした婦人〉

25 さて、異性を知らない若者たち²³⁴については、主の命令をわたしは持っていませんが、主の憐れみに恵まれて忠実な者とされた人間として²³⁵、(わたしの)考えを述べましょう。26 差し迫った今の状況の故に²³⁶、次に示すことがよいことであるとわたしは思っています。すなわ

館、1994年、444～445頁）、A. Sandによる項目“chraomai”（『ギリシア語新約聖書釈義辞典 III』教文館、1995年、523～524頁）、参照。さらに、田川、前掲書、283～287頁の詳細かつ批判的な議論を参照。

²³¹ 「解放されて主のものとなった人」と訳したのは、apeleutheros kyriou「主の解放奴隷」が直訳。apeleutheros「解放奴隷」、説明的に言えば「奴隷から解放されて自由人となった者」。

²³² 「代価を払ってあなたがたは買い取られた」は、timēs ēgorasthēte。6：20に、語順を入れ替えただけの ēgorasthēte gar timēs という文章がでていた。注203、参照。

²³³ 「召されたときの状態に、まさにその状態に」と訳したのは、en hōi eklēthē … en toutōi。6：20に、類似表現 en tēi klēsei hēi eklēthē, en tautēi が出ていた。

²³⁴ 「異性を知らない若者たち」と訳したのは、tōn parthenōn < parthenos「処女、童貞、結婚前の娘、乙女」。女だけでなく男にも使う。前置詞 peri に支配されて属格。

²³⁵ 「主の憐れみに恵まれて忠実な者とされた人間として」と訳したのは、hōs eleēmenos hypo kyriou pistos eīnai。直訳は、「主によって憐れみを与えられて忠実であるようにされた者として」。日本語として普通の表現にするために「人間」を補った。なお、gnōmēn…didōmi の訳文を最後に持ってこざるを得なかった。なお、pistos eīnai「忠実な者(である)」については、4：2の hina pistos tis heurethēi「忠実な者であることが」、およびそれに関する注107、参照。

²³⁶ 「差し迫った今の状況の故に」と訳したのは、dia tēn enestōsan anankēn。hē anankē は「強制」、「必然」が基本的な意味。enestōsan < enistēmi。中動

ち、人間にとっては、今あるままがよい²³⁷のです。27 あなたが女と(婚姻関係で)縛られているのであれば、解消を求めてはいけません。あなたが女から解放されているのであれば、妻²³⁸を求めてはいけません。28 しかし、たとえあなたが結婚したとしても、罪を犯したことはなりませんし、また、異性を知らない若い女が結婚したとしても、罪を犯したことはなりません。しかし、肉ゆえの苦悩を抱えることになる²³⁹のは、このような者たちなのです。わたしは、あなたがたを案じている²⁴⁰のです。29 しかし、兄弟のみなさん、わたしが言いたいのはこれ²⁴¹

相, 完了, 分詞, 女性, 単数, 対格。「今そこにある, 差し迫っている」を意味する。少なくともパウロは, 自分の存命中にキリストの再臨が実現すると信じていたが, 「忠実な者」たちにとっては, 恵みのときに他ならない神による裁きのとき, それがここで言う *hē anankē*「必然のとき」である。その「今そこに」という切迫した感覚が, この完了分詞で表現されている。

²³⁷ 「人間にとっては, 今あるままがよい」と訳したのは, *kalon anthrōpōi to houtōs eīnai*。「今あるまま」の直訳は「このようにあること」。*houtōs*「このように」は, 目の前のものを指して「このように」と言う状況に由来するので, 「今の状態で, 現状のままで」の意味になる。

²³⁸ もちろん, ここで「女」, 「妻」と訳し分けた単語は, 同じ *gynē* の与格, 属格, 対格である。

²³⁹ 「肉ゆえの苦悩を抱えることになる」と訳したのは, *thlīpsin…tēi sarki hexousin*。直訳は, 「彼らは肉に(ある)苦悩を持つであろう」。*tēi sarki* という与格は, 幾つかの解釈の可能性があるように思うが, 原因, 場所・位置が順当なところか。「肉ゆえの苦悩」, 「肉が原因の苦悩」, あるいはむしろ「肉の苦悩」。

²⁴⁰ 「あなたがたを案じているのです」と訳したのは, *hymōn pheidomai*。しかし, 前後の文脈にじっくり納まる訳語がなかなかみつからない。Liddell & Scott が示す基本的意味は, “*spare*: I. *spare* persons and things, e.g. in war, i.e. not destroy them, c.g.,” なので, 「案じている」と訳した。ちなみに, 項目 “*phēidomai*” (『ギリシア語 新約聖書訳義辞典 III』教文館, 1995年, 466頁) は, われわれの箇所を「わたしたちは, あなたがたをく寛大に扱いたいのです」と訳している。「わたしは, あなたがたをそのような目に遭わせたくない」(フランシスコ会聖書研究所訳), 「わたしは, あなたがたにそのような苦勞をさせたくない」(新共同訳), 「私は, あなたがたを〔それから〕免れさせたい」(青野訳), 「私は, あなた方に遠慮してあげている」(田川訳) など。

²⁴¹ 「これ」と訳したのは, 29 節文頭の *Touto*。この *touto* が *adelphoi*「兄弟

です。時は縮まっている²⁴²のです。このほか²⁴³、妻を持つ者たちも持たない者のように、30 泣く者たちも泣かない者のように、喜ぶ者たちも喜ばない者のように、買い物をする者たち²⁴⁴も持たない者のように、世界を利用する者たち²⁴⁵も十分には利用しない者のようになりなさい²⁴⁶。なぜなら、この世界の姿形²⁴⁷は過ぎ去るからです。 32 しかし、わたしは、あなたがたが心配せずにくれてくれること²⁴⁸を望んでいます。結婚していない男は、主の事柄を、すなわち、どうすれば主に喜んでいただけるだろうかと心配しますが、33 結婚している男は、この世界の事柄を、すなわち、どうすれば妻に喜んでもらえるだろうかと心配して、34 分裂に陥ってしまいます²⁴⁹。また、結婚していない女や異性を知らない若い

のみなさん」の後に来る文の内容を指すことをはっきりさせるために ho kairos synestamenos estin の直前に hoti を挿入している写本が相当数ある。

²⁴² 「(残された)時は縮まっている」は、ho kairos synestalmenos estin。ho kairos 「時」は、ここでは、主の再臨と審判の日までに残されている時を指す。synestalmenos < systellō 「縮める、短縮する、縮小する」。1 aor. 受動, 完了分詞, 男性, 単数, 主格。J. Baumgarten による 項目 “kairos” (『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 II』教文館, 1994 年, 282~285 頁), H. Balz による項目 “systellō” (『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 III』教文館, 1995 年, 355 頁), 参照。

²⁴³ 「このほか」と訳したのは、to loipon。「このほか、さらに、最後に、なお、それから、それゆえ、したがって」など、文脈によって様々な意味を持つ。

²⁴⁴ 「買い物をする者たち」は、agorazontes。語源は、もちろん agorā 「公共広場、市場」。

²⁴⁵ 「世界を利用する者たち」は、hoi chrōmenoi ton kosmon。ここでの ton kosmon の使用法・意味については、ton aiōna toūton 「この世」や ton kosmon toūton 「この世界」と峻別し難いように思われる。

²⁴⁶ 「なりなさい」と訳したのは、命令法の代用としての hina。

²⁴⁷ 「この世界の姿形」と訳したのは、to schēma toū kosmou toutou。

²⁴⁸ 「あなたがたが思い煩わずにくれてくれること」は、hymās amerimnous eīnai。amerimnaō < 否定の接頭辞 a + merimnaō 「心配する、気にかける、気遣う、思い煩う」< merimna 「心配、気がかり、思い煩い」

²⁴⁹ 「分裂に陥ってしまいます」は、memeristai < merizō 「分ける、分け与える、分裂させる」。受動で、「分裂する」。現在完了, 受動, 3 人称, 単数。ちなみに、前節にある merimnāi 「心配し」という動詞とちょっとした語呂合わせになっている。

女は、主の事柄を心配してからだも霊も聖なるものになろうとしますが、結婚している女は、この世界の事柄を、すなわち、どうすれば夫に喜んでもらえるだろうかと心配します。35 しかし、このことは、あなたがた自身の利益のために言っているのであって、あなたがたに輪縄を投げかけて(束縛する)²⁵⁰ ためではなく、むしろ、(あなたがたに)品位ある姿で、気を散らされることなく主によく仕える²⁵¹ (ようになつてもらう)ためです。

36 しかし、もし、ある人が異性を知らない自分の女に対して²⁵² 恥ずべきことだと思ひながら²⁵³、相手が十分成熟しており²⁵⁴、同時にそうなるのが避けられない場合には²⁵⁵、自分が望むことをしなさい。罪を犯すことにはなりません。二人は結婚しなさい²⁵⁶。37 しかし、その人が自分の心のうちにしっかりと立ち²⁵⁷、強制されずに、また自分の欲求について

²⁵⁰ 「あなたがたに輪縄を投げかけて(束縛する)」と訳したのは、brochon hymīn epiballō という表現。brochos「縄で作った輪」。縄の一方の端を輪にして、それを馬などの首目がけて投げ掛けて手に引き寄せる作業を思い浮かべるとよい。転意として「束縛する」。

²⁵¹ 「品位ある姿で」は、euschēmon、「よく仕える」は、euparedron。いずれも、接頭辞 eu を伴った単語。前者は「品位ある態度(姿勢)で」のニュアンス。後者はいわゆる hapaxlegomenon。

²⁵² 「異性を知らない自分の女に対して」と訳したのは、epi tēn parthenon autou。

²⁵³ 「恥ずべきことだと思ひながら」は、aschēmoneîn…… nomizeī. aschēmoneō「体裁が悪いことをする、みっともないことをする、さまにならないうことをする、恥ずべきことをする」。

²⁵⁴ 「相手が十分成熟しており」と訳したのは、ē_i hyperakmos。ここでは、ē_i の主語を hē parthenos と解した。ただし、主語を tis と解して読むことも可能。その場合には性欲が自制可能な域を超える事態を指す。「情熱を抑えることができなかつたり」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「情熱を抑えきれず」(青野訳)、また、「それ以上自分を抑制できないと思う」(新共同訳)も後者。

²⁵⁵ 「そうなるのが避けられなくなった場合には」と訳したのは、houtōs opheilei gīnesthai。

²⁵⁶ 36節全体をどう解釈するかについては、田川、前掲書、298～304頁、参照。

²⁵⁷ 「自分の心のうちにしっかりと立ち」は、hestēken……en tēi kardiāi autou

支配権を持って²⁵⁸、自分の心の中で、この異性を知らない女を（今のままの状態）守ろうと決心したのなら、正しく振舞うことになりま
す²⁵⁹。38 だから、異性を知らない自分の女と結婚する人も正しく振舞っ
ていますが、結婚しない人はなお一層正しく振舞うことになるのです。

39 女は、その夫が活着ている期間については、(夫と婚姻関係で)縛ら
れています²⁶⁰が、夫が眠りについたら、自由に自分の望む男と結婚でき
ます。ただ、主にあつてそうする限りですが²⁶¹。40 しかし、今あるまま
に²⁶²留まっている方が、(女は)もっと幸い²⁶³なのです。わたしの考え

hedraïos. 直訳的に訳した。「心にしっかりとした信念をもち」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「心にしっかりとした信念を持ち」(新共同訳)が日本語としては分かりやすいと思うが、どうせ意識するのなら「心に」を省いて「確固たる信念を持ち」,「信念をしっかりと持ち」あたりが適当か。なお、田川訳は、やはり直訳的ではあるが、直後に出る *mē echōn anankēn* とともに一つの句を構成していると解し、「自分の心の中で無理せずしっかりと立ちおり」とする。

²⁵⁸ 「また自分の欲求について支配権を持って」は, *exousiān de echei peri tou idiou thelēmatos*. 新共同訳のように、直前の *mē echōn anankēn* と関連させて「無理に思いを抑えつけたりせずに」と訳するのは、おそらく誤訳の部類。むしろ、パウロは、よくやるように、ほぼ同じ意味の句を畳み掛けて強調しているに過ぎないのだから、原文のまま、並列的に訳するのがよいと思う。つまり、「自分の心のうちにしっかりと立ち」も「強制されずに」も、「自分の欲求に支配権を持って」も、実はほとんど同じ内容のことを別の言葉で言い換えているのである。

²⁵⁹ 「正しく振舞うことになります」は, *kalōs poiēsei*. 「よいことをすることになるのです」(フランシスコ会聖書研究所訳)。「よく振舞うことになるであろう」(青野訳)。なお、「そうしたらよいでしょう」(新共同訳)、「それは結構なことです」(田川訳)は、意識。

²⁶⁰ 「縛られています」は, *dedetai*. 27 節、参照。

²⁶¹ 「ただ、主にあつてそうする限りですが」と訳したのは, *monon en kyriōi*。パウロが補足的に付け足した句。この句の解釈については、特に田川、前掲書、305 頁、参照。なお、フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳の当該箇所注も参照。

²⁶² 「今あるままに」は, *houtōs*. 26 節の *kalon anthrōpōi to houtōs einai* 「人間にとっては、今あるままがよいのです」、参照。

²⁶³ 「もっと幸い」は, *makariōtera* < *makarios*. 比較級の女性、単数、主格。誰でも、有名な「山上の説教」の真福八端 (*beatitudo*) でそれぞれの文

に基づいて(こう言いましたが), わたしもまた神の霊を持っていると思います²⁶⁴。

8

〈偶像に供えられた肉〉

1 さて, 偶像に供えられた肉²⁶⁵ については, われわれの誰もが知識²⁶⁶ を持っていることをわたしたちは承知しています。知識は人を威張らせませんが, 愛は人を造り上げてくれます²⁶⁷。2 もし, 誰かが(自分は)何かを知っていると思っているとすれば, その人はまだ, 知らなければならぬとおりの仕方では知ってはいない²⁶⁸ のです。3 しかし, もし, 誰か

章の最初に繰り返される makarioi 「幸い」を思い起こすところ。

²⁶⁴ こども, 主の命令に基づく発言ではなく, 自分自身の考えに基づいた発言だ, とパウロは主張するが, とはいえ, 自分はただの世俗的な人間(つまり, 「肉」)ではなく, 神の霊をいただいてそれをしっかりと保持している人間としての発言だと最後に付け加えて, 神の判断と異ならないことを強調している。また, 男である自分も今結婚していない者として, 神の霊を持って幸いを実感しつつ宣教に邁進しているのだから, 女も結婚しないでいる方が結婚するより遥かに幸いなのだ, その実例がわたしパウロなのだ, というニュアンスがあるかもしれない。

²⁶⁵ 「偶像に供えられた肉」は, tōn eidōlothytōn < eidōlothytos. eidōlothytos < eidōlon 「偶像, 神像」+ thyō 「屠る, 屠殺する」。

²⁶⁶ 「知識」は, gnōsis. ここは, その対格形。すぐ次の文章に主格形が出る。

²⁶⁷ 「威張らせませす」は, physioō. 「造り上げてくれます」は, oikodomeō. physioō 「膨らます, 膨れ上がらせる, 威張らせる」。従来は転義として「高ぶらせる(新改訳, 新共同訳, 青野訳), 思い上がらせる(フランシスコ会聖書研究所訳)」と訳されることが多かった。語源的には, 「鞆(ふいご)で膨らませる」なので, 「ふくれ上がらせる」(田川訳)が最も原意に沿ったもの。せいぜい, 「威張らせる」程度がよいと思う。なお, 受動相が 4:6, 18, 19 に既に出ていた。注 120, 参照。oikodomeō は, 元来「(建物を)建てる, 建築する, 建設する」を意味し, そこから転義として「(人)を造り上げる, 強化する, (徳, 品性を)高める, 向上させる」の意味も加わっている。10:23, 14:3~5, 12, 17, 26; 2 コリント 10:8, 12:19, 13:10, ローマ 14:19; 1 テサロニケ 5:11, 参照。

²⁶⁸ 「その人はまだ, 知らなければならぬとおりの仕方では知ってはいない」と

が神を愛しているとすれば、その人は神によって知られています。 4
そこで、偶像に供えられた肉を食べることについては²⁶⁹、わたしたちは
世界に如何なる偶像も存在しないことを承知していますし、また、唯一
の神以外如何なる神も存在しない²⁷⁰ ことを(承知しています)。5 なぜな
ら、天上であれ地上であれ、神々と呼ばれているものがあるとしても、
実際、多くの神々、多くの主がいるのですが、

6 しかし、わたしたちにとっては、神は唯一、御父のみ²⁷¹
この御父から万物は出、わたしたちは御父に向かう²⁷²、
また、主も唯一、キリストであるイエスのみ²⁷³
この方とおして万物はあり、わたしたちもこの方とおし
てある(のです)。

7 しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人々
は、今までの偶像に関する習慣のゆえに²⁷⁴、偶像に供えられた肉として
(供え物を) 食べますが、彼らの意識が弱いために²⁷⁵、汚されるのです。

訳したのは、oupō egnō kathōs deī gnōnai。正確に訳そうとすると、この
ように若干冗長になってしまうが、致し方ない。

²⁶⁹ 「偶像に供えられた肉を食べることについては」と訳したのは、Peri tēs
brōseōs…tōn eidōlothytōn. brōseōs < brōsis 「食べ物、食物、食べるこ
と」。ここは「食べること」を意味するので、「…肉を食べること」と訳さざ
るを得ない。

²⁷⁰ 「唯一の神以外如何なる神も存在しない」は、oudeis theos ei mē heis。

²⁷¹ 「神は唯一、御父のみ」は、heis theos ho patēr。

²⁷² 「御父から出」は、ex hou。「御父に向かう」は、eis auton。hou は関係代
名詞、男性、単数、属格。先行詞は ho patēr。auton は、人称代名詞代わり
に使われる強意代名詞、男性、単数、対格。やはり、ho patēr を受ける。

²⁷³ 「主も唯一、キリストであるイエスのみ」は、kai heis kyrios Iēsous
Christos。6 節前半に出る「神は唯一、御父のみ」heis theos ho patēr と明
らかに対をなす表現。

²⁷⁴ 「今までの偶像に関する習慣のゆえに」は、tēi synētheiāi heōs arti tou
eidōlou。tēi synētheiāi は原因を示す与格。

²⁷⁵ 「彼らの意識が弱いために」は、hē syneidēsis autōn asthenēs ousa。
asthenēs ousa は、分詞の述語的用法で状況を表し、ここでは、より詳しく
は原因を表す。syneidēsis は、従来「良心」と訳されるのが通例であった。
田川訳が「意識」とする。

8 しかし、食べ物がわたしたちを神の許に連れて行くわけではありません
 276。食べたからといって、わたしたちが不利になる²⁷⁷ わけではなく、
 食べたからといって、わたしたちが有利になる²⁷⁸ わけでもないのです。
 9 しかし、あなたがたのこの自由²⁷⁹ が弱い人々にとって躓き²⁸⁰ となら
 ないように気をつけなさい。10 実際、もし誰かが、知識を持っているあ
 なたが偶像の神殿で食卓に着いているのを²⁸¹ 見たら、彼自身弱いために²⁸²、
 その意識が偶像に供えられた肉を食べるように造り上げられ²⁸³ は
 しませんか。11 実際、その弱い人はあなたの知識によって滅びるので

²⁷⁶ 「しかし、食べ物がわたしたちを神の許に連れて行くわけではありません」
 は、brōma de hēmās ou parastēsei tōi theōi。parastēsei は、paristēmi の
 3人称、単数、未来。「…の前に立たせる、出頭させる、…の許に導く、連れ
 て行く」。

²⁷⁷ 「不利になるわけではなく」と訳したのは、oute……hysteroumetha。
 hysteroumetha は、hystereō「遅れる、逸する、欠ける、不足する、劣る」
 の中動相、1人称、複数。

²⁷⁸ 「有利になるわけでもない」と訳したのは、oute……perisseuomen。peris-
 seuō「(あり) 余る、溢れる、富んでいる、豊かである、益になる」。

²⁷⁹ 「あなたがたのこの自由」と訳したのは、hē exousiā hymōn hautē。「裁
 量権」とも訳しうる。「自由なふるまい」(フランススコ会聖書研究所訳)、「自
 由な態度」(新共同訳)、「力」(田川訳)、「権限」(青野訳) など。

²⁸⁰ 「躓き」は、proskomma。1:23 に出る skandalon と同じ訳語を用いた
 が、後者は語源的には「妨げ、障害」がよいかもしい。

²⁸¹ 「あなたが偶像の神殿で食卓に着いているのを」は、se……en eidōleōi
 katakeimenon。katakeimai「横にな(っ)てい(る)、横たわ(っ)てい(る)、
 床についている、寝ている」が原意。そこから「食卓に着く、食事の席に着
 く」。われわれに最も馴染みの例は、プラトンの『饗宴』symposion だと思わ
 れるが、福音書にもこの意味で使われる例がある。マルコ 14:3、ルカ 7:
 37、参照。同じ意味を表す動詞に anakeimai がある。最後の晚餐などの場
 面で使われているのはこちら。いずれにしても、食卓を囲んで設置された長椅
 子に会食者が横になって食事をしたギリシア・ローマ世界の慣習が背景にあ
 る。

²⁸² 「彼自身弱いために」と訳したのは、asthenēs ontos。ontos は、もちろ
 ん、分詞の属格で独立的用法 (genitivus absolutus)。

²⁸³ 「その意識が…造り上げられ」と訳したのは、hē syneidēsis autou……
 oikodomēthēsetai。なお、oikodomeō という同じ動詞が、1節にも「愛は造
 り上げてくれます」として出ていた。

が、この人こそ兄弟であり、彼のためにキリストは死なれたのです²⁸⁴。12 それで、あなたがたが兄弟に対して罪を犯し彼らの弱い意識を打ち付けていても²⁸⁵、キリストに対して罪を犯していることになります。13 それだから、もし、食べ物わたしの兄弟を躓かせるのであれば、そもそも肉というものを²⁸⁶ 未来永劫²⁸⁷ わたしは食べません。それはわたしの兄弟をこのわたしが躓かせないためです。

9

〈使徒の権利〉

1 わたしは自由ではありませんか。わたしは使徒ではないですか。わたしたちの主であるイエスをわたしは見たではありませんか。あなたがたは、主にあつて²⁸⁸、わたしの働きの成果²⁸⁹ ではないですか。2 もし、他の人々に対してわたしが使徒ではないとしても、あなたがたに対してはわたしが使徒なのです²⁹⁰。なぜなら、あなたがたは、主にあつて、わたしの使徒職の証印²⁹¹ だからです。 3 わたしを批判する人々に対す

²⁸⁴ 「彼は兄弟であつて、彼のためにキリストは死んだのです」と訳したのは、ho adelphos di' hon Christos apethanen。従来は、ho adelphos が主格であることを訳文に表していない訳が多かった。前田訳、フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳以外がそうである。

²⁸⁵ 「……ていても」と訳したのは、hamartanontes……typtontes という2つの動詞の分詞、主格の形。意識をすれば「……することによって」。

²⁸⁶ 「そもそも肉というものを」と訳したのは、krea という単語。ここで、パウロは、偶像に供えられた肉 eidōlothytos ばかりでなく、肉全般を食べない、肉は一切口にしない、と主張しているので、そのニュアンスを訳文に表すために、こう訳した。

²⁸⁷ 「未来永劫」と訳したのは、eis ton aiōna. aiōn の「この世」の含意から、むしろ「生きている限り」のニュアンスがあろう。

²⁸⁸ 「主にあつて」は、en kyriōi。

²⁸⁹ 「わたしの働きの成果」は、to ergon mou。「わたしの働きの結果」。

²⁹⁰ 「あなたがたに対してはわたしが使徒なのです」と訳したのは、alla ge hymīn eimi。もちろん、「使徒」という単語は、alla の前に既に出ているので、繰り返されていない。

²⁹¹ 「わたしの使徒職の証印」は、hē…sphragis mou tēs apostolēs。

る²⁹² わたしの弁明はこれです²⁹³。4 わたしたちは、食べたり飲んだりする権利を持たないのでしょうか。5 わたしたちは、姉妹を²⁹⁴ 妻として連れて歩く権利を持たないのでしょうか。他の使徒たちも主の兄弟たちも、そしてケファも（そうしている）ように。6 あるいは、わたしとバルナバだけは、働かずにいる権利を持たないのでしょうか。7 いったい誰が、自分で給料を払って²⁹⁵ 兵隊になりますか。誰が、ぶどう園を造っていながら、その実りを食べずにいるのでしょうか。あるいは、誰が、羊の群れを飼っていながら、その羊の群れの乳を飲まずにいる²⁹⁶ でしょうか。8 人間的な見方で²⁹⁷ これらのことをわたしは話しているのでしょうか、律法もまたこれらのことを述べていませんか。9 なぜなら、モーセの律法の中に、「脱穀している牛に口籠を嵌めてはいけない」²⁹⁸ と書かれているからです。（この場合）牛のことでしょうか、神にとって気がかりなのは。10 それとも、専ら²⁹⁹ わたしたちのために（律法は）述べているのではありませんか。実際、わたしたちのために次のことが³⁰⁰ 書かれたので

²⁹² 「わたしを批判する人々に対する」は、 *tois eme anakrinousin*。ここで「批判する」と訳した動詞 *anakrinō*（ただし、ここでは分詞、男性、複数、与格）は、文脈に応じて「判断する」（2：14～15）、「裁く」（4：3～4）と訳し分けられている。

²⁹³ 「これです」は、 *estin hautē*。この指示代名詞は、直前あるいは少し前に言及された内容を指すこともあれば、後続の内容を指す場合もあり、結局は文脈で判断するしかない。私訳が依拠しているネストレ 27 版は、2 節と 3 節の間を少し空けているので、*hautē* を後続する内容を指すものと解している。しかし、内容的にはどちらとも解しうる。

²⁹⁴ 「姉妹を」は、 *adelphēn*。具体的には、信仰を同じくする女性を指す。

²⁹⁵ 「自分で給料を払って」は、 *idiois opsōniois*。より直訳的には「自前の給料で」。

²⁹⁶ 「飲まずにいる」と訳したのは、 *ouk esthieī*。すぐ前の「食べずにいる」と同じ単語。

²⁹⁷ 「人間的な見方で」と訳したのは、 *kata anthrōpon*。あるいは「人間的な判断で」。「人間的に」（青野訳、田川訳）、「人間的な考えによる」（フランシスコ会聖書研究所訳）など。

²⁹⁸ 申命記 25：4、参照。

²⁹⁹ 「専ら」と訳したのは、 *pantōs*。

³⁰⁰ 「次のことが」と訳したのは、 *hoti. egraphē*「書かれた」に続いて出る *hoti* は、当然「引用」を示す。それを訳文に表さないのは翻訳として誠実な態度

す。すなわち、「耕す者³⁰¹は、希望をもって耕すべきであり、また、脱穀する者は、分け前に与る希望を持って(脱穀すべきである)」³⁰²と。11もし、わたしたちがあなたがたに霊的なものを蒔いたとすれば、わたしたちがあなたがたから³⁰³肉的なものを刈り取ることになったとしても、それが大それたこと³⁰⁴でしょうか。12もし、他の人々が、あなたがたのこの権利に与っているとすれば、わたしたち(が与るの)はなおさらではありませんか。しかし、わたしたちは、この権利を利用することはせずに、かえって、一切を、耐え忍んでいます。それは、キリストの福音に対する妨げを何も、わたしたちが与えないためです。13あなたがたは知らないのですか、聖なる供え物の仕事をする人々³⁰⁵が、神殿から出る[物]を食べ、祭壇に仕える人々が祭壇の分け前にともに与る³⁰⁶こと

ではない。協会訳、バルバロ訳、フランシスコ会聖書研究所訳、新改訳、前田訳、新共同訳はいずれも egraphē を直前の問いに応じるものと解しているが、田川も言うように、これは無理。田川、前掲書、314～315頁、参照。hoti を「引用」を示すものとして訳しているのは、青野訳、田川訳。本田訳は、そもそも、hoti の前にある di' hēmās gar egraphē という文章を訳文から除いている。しかし、写本上の支持がない限り、これをしてはいけない。

³⁰¹ 「耕す者」は、arotriōn. arotriō 「耕す」<arotion 「鋤」。元来は「鋤を使って耕す」の意味。

³⁰² ネストレの欄外注には、参照箇所としてシラ書6:19が示されているが、所謂引用ではない。共通しているのは、ho arotriōn 「耕す者」という単語だけ。「耕す者や種蒔く者のように、知恵に近づき、その良き実りを待ち望め。知恵に近づくにはしばし苦勞するが、やがてその果実を食べることになるだろう。」

³⁰³ 「あなたがたから」と訳したのは、hymōn。

³⁰⁴ 「大それたこと」と訳したのは、mega. megas 「大きな」に含まれるもともとの音や文字を生かして訳しているのは、「大事」(バルバロ訳)、「大ごと」(前田訳)、「大それたこと」(フランシスコ会聖書研究所訳、本田訳)。「重大なこと」(青野訳)である。他は、「行き過ぎ」(協会訳、新改訳、新共同訳、田川訳)。ちなみに、柳生訳は「越権」。

³⁰⁵ 「聖なる供え物の仕事をする人々」と訳したのは、hoi ta hiera ergazomenoi。複数形の ta hiera は、「(聖なる) 供え物、献げ物、犠牲」。直後の「神殿から」と訳したのは、ek tou hierou で単数形。

³⁰⁶ 「祭壇の分け前にともに与る」と訳したのは、tōi, thysiastēriōi, symmerizontai。

を。14 こういうわけで、主もまた、福音を伝達する人々に対して、福音を生活手段とすること³⁰⁷を命じたのです。15 しかし、これらのことを一切わたしは利用してきませんでした。しかし、わたしがこのようなことを書いたのは、わたしについてそうやってほしいため³⁰⁸ではありません。実際、わたしにとっては、むしろ死ぬことの方が——³⁰⁹より良いことで、わたしの誇りを誰も無にすることはないでしょう。16 なぜなら、わたしが福音を告げ知らせても、わたしにとって誇りではないからです。わたしにとってそれは必然³¹⁰なのですから。実際、もし、わたしが福音を告げ知らせないとすれば、わたしには災いがある³¹¹のです。17 なぜなら、もし、自分の意思で³¹²わたしがこれをするのであれば、報酬を得るでしょうが、しかし、自分の意思とは無関係に³¹³(するの)であ

³⁰⁷ 「福音を生活手段とすること」と訳したのは、ek tou euangeliou zēn。もちろん、かなり思い切った意識。直訳は「福音による生活」。この場合は、具体的に生活手段を何に頼るかという問題なので、こう訳した。

³⁰⁸ 「わたしについてそうやってほしいため」と訳したのは、hina houtōs genētai en emoi。直訳は、「わたしにおいて、そのようになるため」。

³⁰⁹ もともとのテキストに比較の対象が欠落している。推測すれば、パウロは、口述しているとき、比較の対象を言い添える積りで、むしろ自分にとっては死ぬことの方が良いのだと言ったけれども、そこで、それを言うのをやめて次の文章に移ってしまったということであろう。田川、前掲書、316～317頁、参照。

³¹⁰ 「わたしにとってそれは必然」は、anankē…moi epikeitai。直訳すれば、「必然がそれをわたしに負わせる」。パウロは、使徒として召命された限りは、福音を告げ知らせることは必然的な課題に他ならないと受け止めていたが、ここはその表明。

³¹¹ 「わたしに災いがある」は、ouai…moi estin。ouai「災い！」は、預言者の言語慣用由来し、それを継承する形で、痛み、嘆き、威嚇を表すために用いられる。新約聖書でおそらく最も有名な箇所は、平地の説教における makarioi「幸い！」との対比であろう(ルカ6章、makarioi=20b～21, ouai=24～25, 23と26との対比も参照)。ただし、当該箇所では、慣例として「不幸」という訳語が用いられてきた。

³¹² 「自分の意思で」と訳したのは、hekōn。「自発的に、自らの意志で、進んで、意図的に」。

³¹³ 「自分の意思とは無関係に」と訳したのは、akōn。この単語の成り立ち(a+hekōn)を生かしながら、同じ節の前半に出ている hekōn との意味上の対比

れば、わたしが職務を³¹⁴ 信託して委ねられている³¹⁵ ことになるからです。18 それでは、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるとき³¹⁶、わたしが無報酬で福音を提供し、その結果³¹⁷ 福音におけるわたしの権利を利用しないでいられることです。

19 実際、わたしはすべての人から自由ですが、すべての人に自ら奴隷として仕えました³¹⁸。それは、より多くの人を獲得するためです。20 ユダヤ人に対してはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々に対しては律法の下にある者のようになりました。わたし自身は律法の下にはありませんが、律法の下にある人々を獲得するためです。21 律法の無い人々に対しては³¹⁹ 律法の無い者のようになりました。わたしは、神の律法の無い者³²⁰ ではなく、むしろキリストの律法のうちにある者³²¹ ですが、律法の無い人々を獲得するために(そうになりました)。22 弱い人々に対しては弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に対して、わたしはすべてのもの

が明瞭になるように、こう訳した。

³¹⁴ 「職務を」と訳したのは、oikonomiān。説明的に訳せば、「神の計画を遂行する職務」。

³¹⁵ 「信託して委ねられている」と訳したのは、pepisteumai < pisteuō 「信じる、信託する、(信託して)委ねる、委託する、任せる」。受動、現在完了、1人称、単数。

³¹⁶ 「福音を告げ知らせるとき」と訳したのは、euangelizomenos という中動相の分詞で男性、単数、主格形。

³¹⁷ 「その結果」と意識したのは、eis という前置詞。

³¹⁸ 「すべての人に自ら奴隷として仕えました」は、pāsin emauton edoulōsa. douleuō は、やはり単に「仕える」ではなく「奴隷として仕える」と訳したい。

³¹⁹ 「律法の無い人々に対しては」は、tois anomois。生まれながらのユダヤ人との間に垣根を設けて異邦人を罪人と捉えるユダヤ人の常識を拭い去れなかったパウロにとって、anomos 「律法の無い」は、まさに「不法、無法」のニュアンスをも内包するものであったろう。

³²⁰ 「神の律法の無い者」は、anomos theou。anomos 「律法の無い者」に theou 「神の」を付けることによって、元来、律法が神の意志を体現するものであることを、パウロは示唆した。

³²¹ 「キリストの律法のうちにある者」は、ennnomos Christou。

になりましたが、それは、あらゆる手段を使って³²²、幾人かでも救うためです。23 どんなことでも、福音のためであれば、わたしはします。それは、わたしが福音とともに与る者³²³ となるためです。

24 あなたがたは知らないのですか、競技場の中を走る者³²⁴ は全員が走るけれども、賞を得るのはただ一人だということを。あなたがたも、同じように³²⁵ 走りなさい。あなたがたが(それを)しっかり手にするため³²⁶ です。25 ところで、競技する者³²⁷ は皆、あらゆることに節制します。その際、彼らは朽ちる冠を得るためにそうしますが、わたしたちは朽ちない冠のため(にそうするの)です。26 それゆえ、このわたしは³²⁸、しっかり目標を見定めて走っています³²⁹ し、決して空を打たない

³²² 「あらゆる手段を使って」と訳したのは、*pantōs*。この節は、*tois pāsīn gegona panta, hina pantōs tinas sōsō*、というように語源を同じくする *pāsīn, panta, pantōs* という3つの単語の配置が絶妙で、中々にリズムカルである。訳の上でも「すべて」を連ねて語感を出そうと努めた。

³²³ 「福音とともに与る者」と訳したのは、*synkoinōnos autou*。autou は、同じ節の前半にある *to euangelion* 「福音」を受ける。他の訳として「福音をともに分かち合う者」「福音の共同者」(田川訳)はおそらく分かりにくい。

³²⁴ 「競技場の中を走る者」は、*hoi en stadiōi trechontes*。あるいは「競技場の(中の)走者」。

³²⁵ 「同じように」は、*houtōs*。意味は、「賞を得るただ一人の走者のように」。

³²⁶ 「あなたがたが(それを)しっかり手にするため」は、*hina katalabēte*。kata-は、ここでは強意を表す接頭辞。「しっかり得る、確実に得る」など。もちろん、単に「得る」も可。

³²⁷ 「競技する者」は、*ho agōnizomenos*。agōn, agōnizomai については、G. Dautzenberg による当該項目(『ギリシア語 新約聖書釈義辞典 I』教文館、1993年、53~55頁)、参照。

³²⁸ 「このわたしは」と訳したのは、文面に表れている *egō*。周知のとおり、ギリシア語では、語り手が強調しようとしめない限り、*egō* は文面には表されない。ここでは、その「強調」を「このわたしは」で表現した。

³²⁹ 「しっかり目標を見定めて走っています」と訳したのは、*houtōs trechō hōs ouk adēlōs*。こういう箇所は、パウロが言わんとしている意味を重視して思い切って訳すしかない。①彼は、*trechō* 「走っている」と肯定的に表現しているの、それを訳文に表すこと、② *ouk adēlōs* は、二重否定ではあるが、日本語に訳す場合はむしろ強調された肯定として訳すこと、③既に、彼が、競技場における走者の比喩を用いて、わたしたちは朽ちない冠という賞を確

(拳闘家の) ように打っている³³⁰ のです。27 むしろ、わたしは、自分のからだを苛め抜いて³³¹、奴隷のように服従させています。それは、他人に宣教しておきながら、わたし自身が失格者³³² となつてはいけないからです。

10

〈偶像崇拜に対する警告〉

1 実際、兄弟のみなさん、わたしはあなたがたに知らずにいてほしくはありません³³³。すなわち、わたしたちの先祖は皆、雲の下にあり、皆、海を通り抜け、2そして、皆、雲の中、また海の中で洗礼を受けてモーセと一つになった³³⁴ のです。3そして、皆が同じ霊的な食べ物を食

実に得るために走ると主張していること。これら3点を考慮して訳すと、私訳のようにならざるを得ない。バルバロ訳、本田訳、田川訳、柳生訳は、①については及第。われわれの箇所(26節前半部)に限って言えば、柳生訳(「はっきりした目標に向かってまっしぐらに」)も訳しすぎではあるが悪くはない。田川訳(「曖昧ではない仕方で」)は原文のニュアンスとは異なり曖昧。協会訳、新改訳、本田訳、フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳は、やはり工夫が足りない。

³³⁰ 「決して空を打たない(拳闘家の) ように打っている」は、houtōs pykteuō hōs ouk aera derōn。翻訳に当たっての方針は、この節の前半部同様(前注、参照) pykteuō「打つ」を肯定として訳すことである。さらに、この動詞の語源(pyktēs「拳闘家」)のイメージを動詞の分詞形 derōn に生かすこと(私訳では、括弧内に入れた)、である。

³³¹ 「苛め抜いて」と訳したのは、hypōpiazō「目の下を殴る」。語源は、hypōpion「目の下の部分」(<hypo「下」+ōps「目、顔」)。転義して「散々に殴る、容赦せずに殴る」、「虐待する。酷使する、苦しめる、苛める、悩ます」など。「からだを容赦せずに殴りつけて、からだを責め苛み、からだを酷使して」も、もちろん可。なお、この動詞は hapaxlegomenon。

³³² 「失格者」は、adokimos。

³³³ 「実際、兄弟のみなさん、わたしはあなたがたに知らずにいてほしくはありません」と訳したのは、Ou thelō gar hymās agnoein。通常は hoti 以下を「次の事は」(フランシスコ会聖書研究所訳)、「次のことは」(共同訳)のように先に訳。ここでは、「すなわち…」と訳した。

³³⁴ 「洗礼を受けてモーセと一つになった」と訳したのは、eis ton Mōūsēn

べ、4 また、皆が同じ霊的な飲み物³³⁵を飲みました。すなわち、彼らは後からついて来た霊的な岩から飲んでいて³³⁶のですが、この岩はキリストだったのです。5 しかし、彼らの大部分の者たちを神はよく思いませんでした。なぜなら、彼らは荒れ野で滅ぼされてしまった³³⁷のですから。6 これらのことは、しかし、わたしたちの予型³³⁸として起ったのです。それは、かの人々がむさぼったように³³⁹、わたしたちが悪をむさぼる者とならないため³⁴⁰です。7 あなたがたは偶像を礼拝する者となって、彼

ebaptisthēsan。ローマ 6：3 に、hosoi ebaptisthēmen eis Christon Iēsoun, eis ton thanaton autou ebaptisthēmen という表現があり、私訳では「洗礼を受けてキリスト・イエスと一つになったわたしたちは皆、その同じ洗礼を受けてその死と一つになったのです」とかつて訳しておいた。「『ローマの信徒のみなさんへ』私訳(II)」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第6号、2005年、35～51頁、参照。当該箇所は35頁。

³³⁵ 「飲み物」は、poma。古典ギリシア語では pōma で、直前に使われている動詞 epion < pinō 「食べる」を語源とする。epion は、2 aor. 3 人称、複数。

³³⁶ 「飲んでいて」は、epinon。時制は未完了過去で、ここは動作の継続・反復を意味する。イスラエルの民が荒れ野を放浪している間ずっと、この岩から湧き出る水で渴きを凌いだという伝承に基づく。出エジプト記 17：1～7(特に6)、民数記 20：7～11、さらに、詩編 78：15、参照。

³³⁷ 「滅ぼされてしまった」と訳したのは、katestrōthēsan < katastrōnnyimi 「分散させる、打ち倒す」。1 aor. 受動、3 人称、複数。同じ動詞は、LXX 訳のヨブ記 12：23、ユディト記 7：14 で用例がある。

³³⁸ 「わたしたちの予型として起ったのです」は、typoi hēmōn egenēthēsan。typoi < typos 「型、類型、予型」。パウロの議論の背景には予型論 (Typologie, typology) が想定される。予形論は、旧約聖書に描かれた諸々の出来事の中に、現代の出来事を先取りした型 (予型) を見る考え方。egenēthēsan は、ginomai の受動で「生じる、起きる」、1 aor. 3 人称、複数。

³³⁹ 「かの人々がむさぼったように」と訳したのは、kathōs kakeinoi epethymēsan。epethymēsan < epithymeō 「渴望する、熱望する、情欲(欲情)を抱く、むさぼる」。1 aor. 3 人称、複数。

³⁴⁰ 「わたしたちが悪をむさぼる者とならないため」と訳したのは、eis to mē eīnai hēmās epithy-mētās kakōn。epithymētās は、epithymētēs 「むさぼる者、渴望する者」の複数、対格。ちなみに、これは hapaxlegomenon。eis to…eīnai という不定詞を伴う前置詞句を「…ために」と目的を意味するものとして訳した。

らのなかのある者たちのようになってはいけません。「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた。」³⁴¹と書かれているように³⁴²。8わたしたちは、姦淫しないようにしましょう、彼らのなかのある者たちが姦淫した結果³⁴³、一日に二万三千人が倒れたのです³⁴⁴。9また、わたしたちは、キリストを試みないようにしましょう。彼らのなかのある者たちは試みた結果、蛇に滅ぼされた³⁴⁵のです。10また、あなたがたは、ぶつぶつ呟いてはいけません、彼らのなかのある者たちはぶつぶつ呟いた結果、滅ぼす者に滅ぼされた³⁴⁶のです。11これらのことは、しかし、予

³⁴¹ LXX 訳, 出エジプト記 32 : 6, 参照。ただし、パウロによる引用では、もともとの *pieñ* が短縮形 *peñ* となっている。なお、訳文では、便宜上、定動詞 (*ekathisen, anestēsan*) を分詞のように不定詞 (*phagein kai pein, paizein*) を定動詞のように訳してある。

³⁴² 「ある者たちのように」の「ように」は *kathōs*, ここの「ように」は *hōsper* をそれぞれ訳したものの。

³⁴³ 「姦淫した結果」と訳したのは, *eporneusan kai. eporneusan* も, *kai* に続く *epesan* も 1 aor. 3 人称, 複数 (現在, 1 人称, 単数形は, それぞれ, *porneuō, piptō*)。なお, ここで, 「姦淫する」は, もちろん, 神とイスラエルの民との関係を婚姻関係と捉えることに由来するもので, 唯一の神から離れて異教の神々と親しく交わることを指している。

³⁴⁴ 原文には *kathōs* があるが, 訳文では省いた (9 節の *kathōs*, 10 節の *kathaper* も同様)。なお, 8 節の内容の背景には民衆記 25 : 1~9 に描かれているペオルにおけるイスラエルの民の「姦淫」とその結果の伝承があるが, 当該の箇所 (9 節) に出ている数字は二万四千人である。

³⁴⁵ 「蛇に滅ぼされた」は, *hypo tōn opheōn apollynto. tōn opheōn* < *ophis* 「蛇」。 *hypo* に支配されて複数, 属格。 *apollynto* < *apollymi* 「滅ぼす, 絶やす, 殺す」。未完了過去, 中動相, 3 人称, 複数。民数記 21 : 4~9, 特に 4b. ~6, 参照。「試みる」については, 詩編 78 : 18, 参照。

³⁴⁶ 出エジプト記 15~17 (特に 16 : 2~3), 民数記 14~17 (特に 14 : 2, 36 ; 16 : 11~35), 参照。 *gongyzete, egongysan* < *gongyzō* 「ぶつぶつ言う, 呟く, 不平を言う」。この動詞は, 発音自体から推測されたとおり, 擬声語である。そのイメージを形づくる枠組みは, 参照箇所でも描かれる, 出エジプト後の荒れ野にあってイスラエルの民がモーセに向かって呟いた, 主なる神に対する不平である。私訳では, 擬声語たしさを出すために, 敢えて「ぶつぶつ呟く」とした。なお, 「滅ぼされた」, 「滅ぼす者」と訳した語は, それぞれ *apōlonto, olothreoutou* であるが, いずれも 9 節の *apōllynto* 「滅ぼされた」

型として、かの人々に生じた³⁴⁷のです。つまり、(これらのことは)わたしたちの論しのために³⁴⁸書かれたのであり、わたしたちには世の終りが到来している³⁴⁹のです。12だから、立っていると思う者は、倒れないように注意なさい。13あなたがたを襲った試練で人間的でないものは一つもありませんでした³⁵⁰。神は真実な方³⁵¹であり、あなたがたの力を超えた試練にあなたがたが遭うことをお許しにはならず³⁵²、むしろ、その

と同語源である。olothreoutou(属格)の主格形は olothreutēs で、olethreutēs の三つ目の字母 e が語頭の o に同化したもの。語源を遡れば、olethreutēs < olethreuō < olethros < ollymi 「滅ぼす」。もちろん、apollymi は、apo + ollymi。

³⁴⁷ 「これらのことは、しかし、予型として、かの人々に生じた」と訳したのは、taūta de typikōs synebainen ekeinois。6 節には、taūta de typoi hēmōn egenēthēsan 「これらのことは、しかし、わたしたちの予型として起った」という文章があった。とりあえず、symbainō と gīnomai を「生じる」、「起る」と訳し分けた。なお、typōs を「警告」と訳すのは、明らかに意識の範囲を超えている(青野訳)。

³⁴⁸ 「わたしたちの論しのために」と訳したのは、pros nouthesiān hēmōn。4 : 14 に hōs tekna mou agapēsa nouthetō [n] 「愛する子どもたちとして教え諭す [ため]」という句がある。

³⁴⁹ 「わたしたちには世の終わりが到来している」と訳したのは、eis hous ta telē tōn aiōnōn katēntēken。関係代名詞 hous の先行詞は、eis の前の hēmōn。katēntēken < katantaō 「達する、到着する、到来する、臨む、手に入る」。現在完了、3 人称、単数。主語は ta telē tōn aiōnōn で、中性、複数の場合、動詞が単数になる例。

³⁵⁰ 直訳すると、「人間的ではない試練があなたがたを襲ったことはありません。」eilēphen < lambanō 「取る、捕える、得る、襲う」。現在完了、3 人称、単数。

³⁵¹ 「神は真実な方」と訳したのは、pistos…ho theos。1 : 9 にも出ていた。pistos, pisteuō 同様、peithō の現在完了形(ただし、意味は現在)「信頼する、確信する」を語源とする。「信じるに足る、信頼に値する」、あるいは「真実な、信実な」。

³⁵² 「あなたがたの力を超えた試練にあなたがたが遭うことをお許しにはならず」と訳したのは、ouk easei hymās peirasthēnai hyper ho dynasthe。hyper ho dynasthe の部分を、従来は「あなたがたが耐えられないような」(新共同訳)のように、この節の最後に出る hypenenkeīn を補って訳するのが常だった。もちろん、誤訳ではないが、私訳では、hyper の元来の意味を文面に出すことと、dynasthe に含まれる「力」のニュアンスを出すことを重視し、

試練とともに、耐えることができるように出口をも作っておいてくださるでしょう。

14 それだから、わたしの愛するみなさん、偶像礼拝を避けなさい。15 賢い人々に対するようにわたしは話しています。わたしが言うことをあなたがたが判断しなさい。16 わたしたちが祝福する祝福の杯³⁵³は、キリストの血との交わり³⁵⁴ではありませんか。わたしたちが裂くパン³⁵⁵は、キリストのからだとの交わり³⁵⁶ではありませんか。17 パンは一つなので、大勢でもわたしたちは一つのからだなのです。なぜなら、わたしたちは皆、一つのパンを分け合って食べる³⁵⁷からです。18 肉によるイスラエルを見なさい。犠牲の献げ物³⁵⁸を食べる人々は、その祭壇と交わる者

dynasthe を名詞的に訳す方法を選んだ。

³⁵³ 「わたしたちが祝福する祝福の杯」は、to potēriōn tēs eulogiās ho eulogoūmen. eulogeō「祝福する」は、そもそも「良く言う」であるが、ここでは「神の祝福を願って祈る」を意味する。W. Bauer は、segnen「祝福する」の他に weihen「聖別する」の意味も想定する。Vgl. W. Bauer, Wörterbuch zum Neuen Testament, 6., völlig neu bearbeitete Auflage von Kurt und Barbara Aland, de Gruyter, 1988, S 652.

³⁵⁴ 「キリストの血との交わり」は、koinōniā…tou haimatos tou Christoū. koinōniā のニュアンスは、「…と一つになること、一体化すること」。つまり、キリストの血を飲む者たちが「キリストと一つになる」、「キリストと一体化する」というイメージがある。「主の晩餐の制定」(11:23~26)、参照。「キリストの血にあずかること」(新共同訳)、「キリストの血を飲んで一致すること」(フランシスコ会聖書研究所訳)。青野訳、田川訳が私訳と同じ。

³⁵⁵ 「わたしたちが裂くパン」は、ton arton hon klōmen. ここでは「パン」が対格のままとなっている。直前の疑問文の文頭に出ている to potēriōn は形の上では主格、対格の何れも可能であるが、ton arton 同様、対格と解するのが順当なところ。前の注で上げた「主の晩餐の制定」にある ho kyrios Iēsous en tē, nykti tē, paredideto elaben arton「主イエスは、引き渡されるその夜、パンを取り」というパウロ自身が受け継いだ伝承を想起させる。

³⁵⁶ 「キリストのからだとの交わり」は、koinōniā tou sōmatos tou Christoū. koinōniā「交わり」については、注 354、参照。「キリストのからだの一つになること、キリストと一つのからだになること」。

³⁵⁷ 「一つのパンを分け合って食べる」と訳したのは、ek tou henos artou metechomen. 直訳は、「一つのパンからともに分け前をいただく」。

³⁵⁸ 「犠牲の献げ物」と訳したのは、tās thysiās. ここでは、具体的には、焼き

たち³⁵⁹ではありませんか。 19では、何をわたしは言っているのでしょうか。偶像に供えられた肉が何か意味あるものだ³⁶⁰とか、あるいは、偶像が何か意味あるものだというのでしょうか。20そのようなことではありません。むしろ、彼らが供えている物は、悪霊に対する³⁶¹ものであって、神に対して [供えているの] ではないということです。わたしは、あなたがたが悪霊どもと交わる者になることなど望みません。21あなたがたは、主の杯と同時に悪霊の杯を飲むことはできませんし、主の食卓と同時に悪霊の食卓に与ることもできないのです。22それとも、わたしたちが主を嫉妬させようというのですか³⁶²。わたしたちは主よりも強い者でしょうか。

〈すべては神の栄光のために〉

23すべてのことが許されています。しかし、すべてのことが役に立つわけではありません³⁶³。すべてのことが許されています。しかし、すべ

尽くす献げ物を指す。ちなみに、9：13には *hoi tōi thysiastēriōi pare-dreouontes tōi thysiasthēriōi symmerizontai* ; 「祭壇に仕える人々が祭壇の分け前とともに与る」という文章が出ていた。

³⁵⁹ 「その祭壇と交わる者たち」と訳したのは、*koinōnoi toū thysiastēriou*。ここにも、「その祭壇と一つになる者たち」、「その祭壇と一体化する者たち」のニュアンスを読み取るべきであろう。

³⁶⁰ 「何か (有意義なもの) である」と訳したのは、*ti estin*。「あるいは」以下も同様。

³⁶¹ 「悪霊に対する」と訳したのは、*daimoniois*。*daimonion* は、「悪霊」であるが、ここでパウロは異教の神々を、こう呼んでいる。次に出る *theōi* は、ニュアンスとしては「唯一の神に」。

³⁶² LXX 訳申命記 32：21、参照。 *autoi parazēlōsan me ep' ou theōi, parōrganisan me en tois eidōlois autōn kagō parazēlōsō autous ep' ouk ethnei, ep' ethnei asynetōi parorgiō autous*。「彼らは、神ならぬ者の故にわたしを嫉妬させ、それらの偶像によってわたしを怒らせた。そこで、わたしは、民ならぬ者の故に彼らを嫉妬させ、愚かな民の故に彼らを怒らせる。」

³⁶³ 「すべてのことが許されています。しかし、すべてのことが役に立つわけではありません」は、*Panta exestin all' ou panta sympherei*。6：12に、*Panta moi exestin all' ou panta sympherei* という *moi* 「わたしには」 だけがないほぼ同一の文章が出ていた。

てのことが建設的³⁶⁴ というわけではありません。24 誰も、自分自身のことを求めてはいけな、むしろ、他人のことを(求めなさい)。25 市場で売られている物は何でも、あなたがたは意識に照らして³⁶⁵ 判断することなく食べなさい。26 なぜなら、「地とそこに満ちているものは主のもの」³⁶⁶ だからです。27 もし、信仰のない者の誰かがあなたがたを招待し、あなたがたが行きたいと思うならば、あなたがたの前に出されるものは何でも³⁶⁷、あなたがたは意識に照らして判断することなく食べなさい。28 しかし、もし、誰かが「これは、神殿に供えられた肉です³⁶⁸ よ」と言ってくれたならば、知らせてくれたその人のために、また意識のために、食べてはいけません。29 意識とわたしが言うのは、自分の意識ではなく、他の人の意識のことです。なぜなら、どうして、わたしの自由が他人の意識によって裁かれることなどあるのでしょうか。30 もし、わたしが感謝して一緒に与っているのであれば、わたしが感謝しているそのもの³⁶⁹ のことで、なぜ、悪口を言われる³⁷⁰ ののでしょうか。31 だから、食べるにしても飲むにしても、何かをするにしても、あなたがたはすべてのことを神の栄光のために³⁷¹ しなさい。32 ユダヤ人に対してもギリシア人に対しても、神の教会に対しても、あなたがたは躓きになら

³⁶⁴ 「建設的」と訳したのは、oikodomeī。動詞であるが、「建てる、建設する」というニュアンスを出すために、形容詞のように訳した。田川訳も同じ。

³⁶⁵ 「意識に照らして」と訳したのは、dia tēn syneidēsino。8:7, 10, 12 同様、syneidēsis は「良心」ではなく「意識」と訳した方がよいと思う。27, 28, 29 節も同様。自分の意識に照らして「食べるか食べないか」を判断する必要は一切ない、とパウロは主張する。田川訳も同じ。

³⁶⁶ LXX 訳詩編 23:1, 参照。26 節は、詩編本文の toū kyriou の後に gar を挿入しただけの文章。

³⁶⁷ 「あなたがたの前に出されるものは何でも」と訳したのは、pān to paratithemenon hymīn。

³⁶⁸ 「これは神殿に供えられた肉です」と訳したのは、toūth hierothyton estino。hierothyton < hieros 「聖なる」+ thyō 「屠る」。hapaxlegomenon。

³⁶⁹ 「わたしが感謝しているそのもの³⁶⁹ のこと」と訳したのは、hyper hou egō eucharistō。

³⁷⁰ 「悪口を言われる」は、blasphēmōūmai < blasphēmō 「悪口を言う、罵る、中傷する、誇る」。

³⁷¹ 「神の栄光のために」は、eis doxān theoū。

ない者³⁷² になりなさい。33 わたしもまた、すべてのことをすべての人の気に入るようにしているのと同じように³⁷³。わたしは自分の利益を求めず、むしろ多くの人の利益を(求めてそうしていますが)、それは彼らが救われるため³⁷⁴ なのです。11 1 あなたがたは、わたしに倣う者となりなさい、わたしもまたキリストに倣う者(となっている)のと同じように。

〈礼拝のときの頭の被い〉

2 さて、わたしはあなたがたを称えます。それは、あなたがたがあらゆることで³⁷⁵ わたしを覚えていてくれて、わたしがあなたがたに伝えたとおりに³⁷⁶、伝えられた教えを堅持している³⁷⁷ からです³⁷⁸。 3 しかし、わたしはあなたがたに知っていてほしいのです。すべての男の頭はキリストであり、女の頭は男、キリストの頭は神だということを。4 男は皆、祈ったり預言したりするときに、頭を被うならば³⁷⁹、自分の頭を侮辱することになります。5 他方³⁸⁰、女は皆、祈ったり預言したりする

³⁷² 「躓きにならない者」は、aproskopoi。

³⁷³ 「…のと同じように」と訳したのは、節の初めの kathōs。

³⁷⁴ 「それは彼らが救われるため」と訳したのは、hina sōthōsin. sōthōsin < sōzō 「救う」。1 aor. 受動相、接続法、3人称、複数。

³⁷⁵ 「あらゆることで」は panta。

³⁷⁶ 「わたしがあなたがたに伝えたとおりに」と訳したのは、kathōs paredōka hymī。

³⁷⁷ 「伝えられた教えを堅持している」と訳したのは、tās paradoseis katechete。

³⁷⁸ 「それは、……からです」と訳したのは、hoti。もちろん、この hoti は、2 節文頭の Epainō「わたしは称えます」の内容を表す接続詞と解することも十分可能だが、語順を重視して訳そうとすると、私訳のように原因・理由を表す接続詞と解するのがよい。

³⁷⁹ 「頭を被うならば」と訳したのは、kata kephalēs echōn。直訳すると「頭から下の部分に(何かを)着けた状態で」。つまり、頭頂部から首にかけてヴェール状の布で被った状態を考えるとよい。例えば、タリットを頭からすっぽり被った状態を思い浮かべるとよいか。

³⁸⁰ 「他方」と訳したのは、de。「対比、対照」を表す用例。

ときに、頭に被いをかけずにいれば³⁸¹、自分の頭を侮辱することになります。なぜなら、それは髪を剃った女とまったく同じ³⁸² だからです。6 実際、もし、女が頭を被わないのであれば、自分で髪を切ってしまいなさい³⁸³。また、もし、女にとって髪を切ったり剃ったりすることが恥ずかしいこと³⁸⁴ ならば、頭を被いなさい。

7 なぜなら、男は、神の似像にして反映だから³⁸⁵ 頭を被うべきではなく、他方、女は、男の反映だからです。8 なぜなら、男が女から出たのではなく、むしろ、女が男から出た³⁸⁶ のですし、9 また、実際、男が女のために造られたのではなく、むしろ、女が男のために造られたから³⁸⁷ です。10 このゆえに³⁸⁸、女は、御使いたちのために³⁸⁹、その頭の上に権

³⁸¹ 「頭に被いをかけずにいれば」と訳したのは、akatakalyptō_i tē_i kephalē_i。akatakalyptō_i < a + katakalyptos < katakalyptō 「頭にものを被る、頭を被う」。男性と女性が同形の形容詞。

³⁸² 「それは髪を剃った女とまったく同じ」と訳したのは、hen…kai to auto tē_i exyrēmenē_i。tē_i exyrēmenē_i < xyraō 「剃る、剃り落とす」。現在完了、受動相、分詞、女性、単数、与格。

³⁸³ 「自分で髪を切ってしまいなさい」と訳したのは、keirasthō < keirō。中・受動相、命令法、3人称、単数。中動相と解した訳。受動相と解すれば、「髪を切ってもらいなさい」。「その女の髪を切つてしまえ」（田川訳）は、勇み足。

³⁸⁴ 「恥ずかしいこと」は、aischron。フランシスコ会聖書研究所訳、新改訳、新共同訳に同じ。「恥ずべきこと」（協会訳）、「はずべき」（前田訳）、「恥辱」（青野訳）、「恥」（バルバロ訳、本田訳、田川訳）など。

³⁸⁵ 「神の似像にして反映だから」と訳したのは、eikōn kai doxa theou hyparchōn。eikōn theou は、いわゆる imago Dei 「神の似像（似姿）」。eikōn は「像、姿、形」で icon の語源。doxa は、伝統的に「栄光」あるいは「誉れ」と訳されてきたが、ここでは、続く 8～9 節の内容から、むしろ「反映」と訳すのがよい。Bauer は、この箇所を上げて、その意味を “Abglanz” としている。W. Bauer, a. a. O., S.409f.。田川、前掲書、334～335 頁も参照。

³⁸⁶ 創世記 2 : 22～23、参照。

³⁸⁷ 創世記 2 : 18, 22、参照。

³⁸⁸ 「このゆえに」は、dia tou_{ito}。

³⁸⁹ 「御使いたちのために」と訳したのは、dia tous angelous。LXX 訳創世記 6 : 1～4、参照。

¹ さて、地上に人が増え始めたとき、彼らに娘たちが生まれた。² しかし、

威 (の印) を³⁹⁰ 着けるべきなのです³⁹¹。11 とはいえ³⁹²、主にあつては³⁹³、男なしに女はなく、女なしに男はないのです。12 なぜなら、女が

神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、選んだ娘たちをすべて自分たちの妻にした。³そこで、主なる神は言われた。『わたしの霊が、これらの人々たちの中に未来永劫にとどまることはない、彼らは肉なのだから。彼らの一生の日数は百二十年となるだろう。』⁴さて、地上には、巨人たちが、当時もその後もいたが、これは、神の子らが人の娘たちのところに入って来ては自分たちのために産ませた者であったが、この者たちは、太古からの巨人たち、名高い人々であった。」ここで hoi hyioi toū theōū 「神の子ら」と訳されているのは、元のヘブライ語では bēnê hā 'ēlōhim である。ちなみに、ダニエル 3 : 25 には、bar 'ēlāhīn (アラム語「神の子」) が出るが、LXX 訳はこれを angelos kyriou 「主の御使い」と訳している。なお、「神の子ら」については、Karel van der Toorn, Bob Becking, Pieter W. van der Horst, *Dictionary of Deities and Demons in the Bible*, E. J. Brill, 1995, pp. 1499-1510, および田川, 前掲書, 335 頁, 参照。

³⁹⁰ 「權威 (の印) を」と訳したのは、exousiān。

³⁹¹ この 10 節を前後の文脈にどう位置づけて読むか、難しいところ。LXX 訳創世記 24 : 65 に、僕に伴われて嫁いで来たりべかが、遠くからやって来るイサクを初めて見て僕に尋ねるシーンがある。「(彼女は)僕に言った。『あの人は誰ですか。わたしたちを迎えに平原をやって来るあの方は。』そこで、僕は言った。『あの方がわたしのご主人です。』彼女は、薄手の長い衣を取って身にまとった。」ここで「薄手の長い衣」と訳したのは、to theristron で Liddell & Scott では light summer garment という訳が示されている。語源を同じくする言葉に、夏の麦刈り作業 (therizō 「夏場の仕事をする、刈り取る、収穫する」) や、収穫作業をする労働者 (theristēr) を指すものがある。女たちが薄手の長い衣にすっぽり身を包んで、男たちと一緒に収穫作業に精を出す姿を思い起こすことができる。

³⁹² 「とはいえ」と訳したのは plēn。ここでは接続詞で、「しかし、それにも拘わらず」、「ただ、いずれにしても、いずれにせよ、とにかく」。文脈から判断して「とはいえ」と訳した。私訳は新改訳に同じ。「ただ」(協会訳)、「いずれにせよ」(新共同訳)、「いずれにしても」(フランシスコ会聖書研究所訳、青野訳)、「しかし、それはそれとして」(本田訳) など。

³⁹³ 「主にあつては」は、en kyriōi。ガラテヤ 3 : 26~28, 参照。28 には、pantes gar hymeīs heīs este en Cheistōi, Iēsoū 「あなたがたは、すべて、キリスト・イエスにあつて一つだからです」という表現が、ouk eni arsen kai thēly 「男も女もない」という表現の直後に出る。対比はわれわれの箇所 (anēr / gynē) と異なり、arsēn / thēlys (これは、むしろ雌 / 雄の対比) であるが。

男から出たもの³⁹⁴であるのと同じように、男も女をとおして(生まれる)もの³⁹⁵だからです。しかし、すべてのものは神から出た³⁹⁶のです。

13 あなたがた自身で判断しなさい。女が被いをつけずに神に祈ることは、ふさわしいことですか。14 自然そのものがあなたがたに教えているではありませんか。男が長い髪でいれば、それは彼にとって恥辱となる³⁹⁷のに対し、15 女が長い髪でいれば、それは彼女にとって誉れとなる³⁹⁸のだ、と。それは、長い髪は被うものの代わりに³⁹⁹ [女に] 与えられたものだからです。16 しかし、もし、誰かが論争したいと思っても⁴⁰⁰、そのような習慣をわたしたちは持っていないし、神の教会ももっていません。

³⁹⁴ 「女が男から出たものである」と訳したのは、*hē gynē ek toū theoū*。これは、創世記 2:21~22 に描かれているアダムから女が造られたという事態を指している。つまり、創造レベルの話である。

³⁹⁵ 「男も女をとおして(生まれる)もの」と訳したのは、*kai ho anēr dia tēs gynaikos*。これは、敢えて創世記に参照箇所を求めるとすれば、「アダムは女をエバと名づけた。彼女がすべて命あるものの母となったからである」と記す 3:20 ということになろうか。実際には男も女(自分の母親)から生まれる、という現実レベルの話である。LXX 訳では、「エバ」は *Zōē* 「命」となっていて、われわれの箇所は、*kai ekalesen Adam to onoma tēs gynaikos autoū Zōē, hoti hautē mētēr pantōn tōn zōntōn*。「そして、アダムはその妻を命と名づけた。それは、彼女がすべて命あるものの母だからである。」となっている。なお、田川訳は「男は女のためにある」とするが、*dia tēn gynaiika* ではないので、やはり可能性は低い。田川、前掲書、336~337 頁、参照。

³⁹⁶ 「しかし、すべてのものは神から出た」と訳したのは、*ta de panta ek toū theoū*。再度、創造レベルに戻っている。

³⁹⁷ 「恥辱となる」と訳したのは、*atimiā…estin*。

³⁹⁸ 「誉となる」と訳したのは、*doxa…estin*。

³⁹⁹ 「被うものの代わりに」は、*anti peribolaïou. peribolaion* < *periballō* 「着せる、まとわせる」、中動相で「身に着ける、まとう、被う」。

⁴⁰⁰ 「しかし、もし、誰かが論争したいと思っても」と訳したのは、*Ei de tis dokei philoneikos eīnai. philoneikos* < *phileō* 「愛する、好む」+ *neīkos* 「争い、喧嘩、口論、論争」。

〈主の晩餐の乱用〉

17 しかし、このことを命じるに際して⁴⁰¹、わたしは称えるわけにはいきません。それは、あなたがたが集まっても、前より良い結果ではなく、むしろ悪い結果をもたらしているからです⁴⁰²。18 第一に、あなたがたが教会に集まる時、あなたがたの間に分裂があると⁴⁰³ わたしは聞いており、幾分かはそれを⁴⁰⁴ 信じてもいるからです。19 実際、適格者⁴⁰⁵ があなたがたの間で明らかになるためには、あなたがたの間に分派争いがあるのも止むを得ないことです⁴⁰⁶。20 (しかし) それでは、あなたがたが同じ場所に集まっても、主の食事を食べることにはなりません⁴⁰⁷。21 なぜ

⁴⁰¹ 「しかし、このことを命じるに際して」と訳したのは、Toûto de parangellôn. Toûto が何を指しているかについては議論がある。すなわち、「以上のこと」なのか、「以下のこと」なのか。訳語としては直訳にした上で、「以上のこと」を暗示しようというのが私訳の意図。

⁴⁰² 「それは、あなたがたが集まっても、前より良い結果ではなく、むしろ悪い結果をもたらしているからです」と訳したのは、hoti oûk eis to kreïsson alla eis to hësson synerchesthe. hoti を直前にある oûk epainō 「わたしは称えるわけにはいきません」の理由を示すもの、また eis を結果を示すものと解して訳したが、主動詞 synerchesthe (<synerchomai) については、このような形で先に訳すしかない。

⁴⁰³ 「あなたがたの間に分裂があると」と訳したのは、schismata en hymîn hyparchein という不定詞句。なお、1：10 に mē ēi en hymîn schismata 「あなたがたの間に分裂がなく」という句が出ていた。

⁴⁰⁴ 「幾分かはそれを」と訳したのは、meros ti。

⁴⁰⁵ 「適格者」は、hoi dokimoi. dokimos は、「(その真正性が) 吟味検証済みの、実証済みの」、「(その資格が) 正式な認証を受けた」などを表す。この形容詞に由来する dokimazō は、3：13 に出るが、ここでは「吟味検証する」と訳した。

⁴⁰⁶ 「実際、あなたがたの間に分派争いがあるのも止むを得ないことです」と訳したのは、deī gar kai haireseis en hymîn einai. hairesis は、haireomai 「選ぶ、選び取る」に由来する名詞。何か特定の教説を選び取って集団を形成する分派、党派、学派。所謂「異端」の語源。deī は、周知のとおり、必然を表す動詞で、対格+不定詞 (accusativus cum infinitivo) を伴う。

⁴⁰⁷ 「主の食事を食べることにはなりません」と訳したのは、oûk estin kyriakon deīpnon phageīn. kyriakon deīpnon 「主の食事」は、通常「主の晩餐」と訳される。

なら、食べるときに、各自が自分の食事を先にとってしまい⁴⁰⁸、その結果、空腹な者もいれば、酔っ払っている者もいる始末だからです。22 一体全体⁴⁰⁹、あなたがたは食べたり飲んだりするための家を持っていないのですか。それとも、神の教会をあなたがたは軽んじて、持っていない者たちを辱めるのですか。何をあなたがたに言いましょう。あなたがたを称えましょうか。(いや、) このことでは、称えるわけにいきません。

〈主の晩餐の制定〉

23 実際、わたしが主から受け取った、まさにそのことをわたしはあなたがたに伝えた⁴¹⁰ のです。すなわち、「主イエスは引き渡される夜、パンを取り、24 感謝しながら裂いて言われた。『これは、あなたがたのためのわたしのからだである⁴¹¹。わたしを思い起こすために、このように行ないなさい⁴¹²。』」25 食事をした後に⁴¹³、杯についても同じようにして、言われた。『この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲む度に、わた

⁴⁰⁸ 「食べるときに、各自が自分の食事を先にとってしまい」と訳したのは、*hekastos...to idion deipnon prolambanei en tōi phagein*。一応、直後に「空腹な者もいれば、酔っ払った者もいる」とあるので、*prolambanō* は原意のまま「先にとる」とした。後からやって来る仲間のことを配慮せずに、先に飲み食いした結果、酔っ払ってしまっている者がいるかと思えば、食事をせずに後からやって来たため空腹な者もいる状況を指摘している。

⁴⁰⁹ 「一体全体」と訳したのは、*gar*。疑問文に出る *gar* は「強意」を表し、訳語としては「一体、一体全体」など。

⁴¹⁰ この節の *hoti* の前までは、関係代名詞に導かれる後半部を先に訳して、前半部を訳すのが普通だが、この手紙を聞く信徒たちの耳に届く順番は可能な限り生かしたいので、私訳では常識的な訳し方を敢えて破っている。

⁴¹¹ 「これは、あなたがたのためのわたしのからだです」と訳したのは、*toūto mou estin to sōma to hyper hymōn*。語順を生かせば、「これはわたしのからだ、あなたがたのためのもの」。

⁴¹² 「わたしを思い起こすために、このように行ないなさい」と訳したのは、*toūto poieite eis tēn emēn anamnēsin*。*anamnēsis* は、「記憶、想起、記念、思い出」。カトリックのミサ式文では、次注で紹介するとおり、「記念」という訳語が使われている。

⁴¹³ 「食事をした後に」と訳したのは、*meta to deipnēsai*。*deipnēsai < deipneō* 「食事をする」。1 aor. 不定詞。

しを思い起こすために、このように行ないなさい。』⁴¹⁴ 26 実際、あなたがたがこのパンを食べ（この）⁴¹⁵ 杯を飲む度に、あなたがたは、主が来られるそのときまで⁴¹⁶、主の死を告げ知らせるのです。

〈主の晩餐の与り方〉

27 だから、ふさわしくない仕方で、主のパンを食べたり、あるいは主の杯を飲んだりする者⁴¹⁷ は、主のからだと血に対して罪を犯した者⁴¹⁸ となるのです。28 そもそも人は⁴¹⁹ 自分自身を検証吟味しなさい⁴²⁰。そし

⁴¹⁴ 23 節後半～25 節は、カトリックのミサにおける「感謝の典礼」で司祭が唱える式文の元になっている文章。参考のために、そのうちの一例を記しておこう。「主イエスは進んで受難に向う前に、パンを取り、感謝をささげ、割って弟子に与えて仰せになりました。『皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ（である）。』食事の終りに、同じように杯を取り、感謝をささげ、弟子に与えて仰せになりました。『皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血（である）。これをわたしの記念として行いなさい。』」

⁴¹⁵ 原文は、ton arton toūton kai to potērion とあり、「この」はパンにしかついていないが、to potērion toūto のように、次の「杯」にまで「この」をつけることは通常避けられる。potērion のあとに pinēte という動詞が来ずに、potērion で文章が終わる場合には、語呂がよいので toūto が添えられるものと思われるが。

⁴¹⁶ 「主が来られるそのときまで」と訳したのは、achri hoū elthēi。前にある ton thanaton toū kyriou katangellete の toū kyriou の主格形 ho kyrios が主語であることは自明。

⁴¹⁷ 「主のパンを食べたり、あるいは主の杯を飲んだりする者」と訳したのは、hos an esthiēi ton arton ē pinēi to potērion toū kyriou. toū kyriou ton arton にもかかるものとして訳した。

⁴¹⁸ 「罪を犯した者」と訳したのは、enochos. enochos < enechomai 「…の下に服する、繋がれる、拘束される」。形容詞で「(裁きに) 服すべき、罰を受けるべき、有罪の」。属格とともに。

⁴¹⁹ 「そもそも人は」と訳したのは、anthrōpos。ある特定の人を指すのではなく、「一般に人は」、「人は誰でも」というニュアンス。

⁴²⁰ 「検証吟味しなさい」と訳したのは、dokimazetō。

て、そうしてから⁴²¹ パンを裂き分けて食べ⁴²²、杯から飲みなさい。29 なぜなら、食べたり飲んだりする者は、そのからだを（他のパンと）区別しなければ⁴²³、自分自身に対する判決を⁴²⁴ 食べたり飲んだりしすることになるからです。30 このことのゆえに⁴²⁵、あなたがたの間には、大勢弱い者や病気の者がおり、またかなりの者が眠りにについている⁴²⁶ のです。31 しかし、もし、自分自身を吟味識別していれば⁴²⁷、わたしたちが判決を受けることはなかったでしょう⁴²⁸。32 しかし、判決を受けながら、わ

⁴²¹ 「そして、そうしてから」と訳したのは、kai houtōs。直訳は「そして、そのようにして」。この場合の「そのようにして」は、「検証吟味して」。

⁴²² 「パンを裂き分けて食べ」と訳したのは、ek toū artou esthietō。一つのパンから一部分を取り分けて食べなさい、という意味なので、このように訳した。

⁴²³ 「そのからだを（他のパンと）区別しなければ」と訳したのは、mē diakrinōn to sōma。多くの写本が to sōma の後に toū kyriou 「主の」を加えている。

⁴²⁴ 「自分自身に対する判決を」と訳したのは、krīma heautō_i。

⁴²⁵ 「このことのゆえに」と訳したのは、dia toūto。

⁴²⁶ 「あなたがたの間には、大勢弱い者や病気の者がいるし、またかなりの者が眠りにについている」と訳したのは、en hymīn polloi astheneīs kai arrōstoi kai koimōntai hikanoī. asthenēs 「弱い、病弱な」。arrōstos 「病気の」。koimōntai <koimaō 「眠らせる」。受動相で「眠っている、眠りに就く、永眠する」。3人称、複数。hikanos 「相当の、かなりの、十分な、大量の」<hikanō, hikneomai, hikō 「達する」。パウロは、コリントの信徒たちの中に、弱い者や病気の者、また死者が多く出ていることの原因を、ふさわしくない仕方でのパンを食べたり主の杯を飲んだりすることに見出している。弱さや病気や死が判決の結果だというのである。

⁴²⁷ 「もし、自分自身を吟味識別していれば」と訳したのは、ei…heautous diekrinomen. diakrinō 「区別する、見分ける、決定する、裁く」。未完了過去。本節は、28～29 節と内容上明らかにパラレルである。したがって、diakrinō と dokimazō とが類義語であることを訳の上で表したいところ。そこで dokimazō 「吟味検証する」との関係性を保持しつつ「区別する」ニュアンスを表すために「吟味識別する」と訳した。「判別する」（田川訳）、「識別する」（青野訳）。

⁴²⁸ ここで使われている動詞は、diekrinomen と ekrinometha で、いずれも 1 aor.。この点を、田川訳（「…裁かれることはなかっただろうに。」）は正確に訳しているが、それ以外の協会訳、バルバロ訳、前田訳、新改訳、フランシスコ会聖書研究所訳、新共同訳、本田訳、柳生訳、青野訳はいずれも、正確

わたしたちは主によって教育されている⁴²⁹のです。それは、わたしたちが世界と一緒に有罪宣告を受けないためです⁴³⁰。33 だから、わたしの兄弟のみなさん、食べるために集まる時は、あなたがたはお互い同士待つようにしなさい⁴³¹。34 もし、誰か空腹な者があれば、家で食べてきなさい。それは、判決のためにあなたがたが共に集まることにならないため⁴³²です。他のことについては、わたしが着いてから⁴³³命じることにします。

に訳していない。

⁴²⁹ 「わたしたちは主によって教育されている」と訳したのは, hypo [toû] kyriou paideuometha.

⁴³⁰ 「それは、わたしたちが世界と一緒に有罪宣告を受けないためです」と訳したのは, hina mē syn tōi kosmōi katakrithōmen. katakrithōmen < katakrinō 「有罪判決を下す, 有罪を宣告する」。1 aor. 受動相, 接続法, 1 人称, 複数。

⁴³¹ 「あなたがたはお互い同士待つようにしなさい」と訳したのは, allēlous ekdechesthe.

⁴³² 「それは、判決のためにあなたがたが共に集まることにならないため」と訳したのは, hina mē eis krima synerchesthe.

⁴³³ 「わたしが着いてから」と訳したのは, hōs an elthō. elthō < erchomai 「来る, やって来る, 近づいて来る, 到来する, 到着する, 着く, 生じる, 起る」。2 aor. 接続法, 1 人称, 単数。